*Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci.*, **61**, 11-21 (2013)
武庫川女子大紀要(人文・社会科学)

# 〔調査報告〕1923 年の『大阪朝日新聞　神戸附録』その 1

山　本　欣　司
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

大　橋　毅　彦
(関西学院大学)

永　井　敦　子
(芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員)

**Abstract**

We, the Society for the Research of Modern Culture of Kobe, have been studying the cultural formation of the port city of Kobe from various aspects. In this paper (which will form the first part of our whole research) we deliver a report on the trend of movies, theater, performing arts, fine arts and photography in the city, by scrutinizing a series of articles, *Zassô-en*, written by the Kobe correspondents, in the newspaper *Kobe Furoku, Osaka Asahi Shimbun*, issued in 1923. Through the *Zassô-en* articles we can see not only various incidents reported by the correspondents but also their love for their hometown, which encouraged them to plan and carry out diverse cultural and artistic events in the town. We can also find the trend of the picture houses and moviegoers in Shinkaichi, Kobe, in those days, especially the way the entrepreneurs attracted people. Concerning the theater, the articles tell us that the things gladly accepted then were comedy and *Shinkokugeki*.

## はじめに

近代の港湾都市神戸の文化形成を，モダニズムにとらわれずさまざまな角度から研究する目的で 2010 年度より活動を開始した神戸近代文化研究会では，これまで『大阪朝日新聞　神戸附録』(1900/10/1 ～ 1924/12/31)や『大阪朝日新聞　神戸版』(1924/12/31 ～ 1940/12/31)を重要な資料として活用してきた．これらは，毎日一～二面にわたって県内の政治・経済・社会・文化・文学などのさまざまな記事や広告を掲載する重要なメディアである．神戸とその周辺の文化的な事象の記録として，「雑草園」や「演芸たより」など紙上の記事をつぶさに調査することによって，私たちは多くの示唆を得た．神戸を中心に活躍する芸術家・文化人，関西のローカルなトピックを研究する際など特に，貴重な情報源となるものである．

今回，私たちは『大阪朝日新聞　神戸附録』の性格をより網羅的に知るためにも，1923 年に的を絞り，兵庫県立図書館所蔵のマイクロフィルム一年分を全ページにわたり，手分けしてその内容の精査を行った．この年の九月には関東大震災があり，谷崎潤一郎などさまざまな文化人が関西に活動拠点を移すなど注目すべき点も多く，充実した内容が期待できるからである．

調査方法としては，メンバーが分担して『大阪朝日新聞　神戸附録』全ページに目を通し，以下の［分類 1］［分類 2］にあてはまるもののうち，ある程度重要と思われるものをすべて，エクセルを用い次頁のような形式でデータベース化することとした．一年分で 1513 項目のデータを抽出できた．内容の重要性については，作成中のデータベースを何度か持ち寄り，すりあわせることでレベルに差が出ないよう配慮した．特に「雑草園」や「演芸たより」については分量が膨大なため，たんなる情報の羅列(どの劇場でどんな芝居が上演されるか，誰のどんな本が出版されるかなど)については割愛し，何らかの批評性や価値付け―面白い，人気を博しているなど―を含むものに絞った．

| 年月日 | 面 | 分類 1 | 分類 2 | 記事名（見出しやリード） | 執筆者 | 備考（内容の紹介など） |
|---|---|---|---|---|---|---|

［分類 1］文学，映画，演劇，芸能，美術，音楽，スポーツ，教育，宗教，文化
［分類 2］小説，詩，短歌，俳句，評論，随筆，漫画，催事，広告，紹介

その後，［分類 1］に準じて担当を決め，さらに詳しく内容の精査を行った．ただし，［分類 1］とは別に「雑草園」のみ，その重要性にかんがみ担当者を別に立てた．

以下，順に調査報告をおこなった後，最後に簡単なまとめを付すこととする．

## 1.「雑草園」に関する動向

「雑草園」は，『大阪朝日新聞』創刊 40 年を迎えた年の夏（1919/6/30）から同紙『神戸附録』でスタート，読者からの投稿も交えて神戸通信部スタッフが組んでいった一種の文芸欄の名称である．ほぼ週に 1 回のペースで掲載されるこの欄の目的は，その第 1 回目にあって「夏だ夏だ，灼く様な陽光を吸ふて滅多矢鱈に延びるのだ(, )隠居の庭の盆栽ならいざ知らずコヽは真夏の「雑草園」延びて延びて延びぬくのだ」といった言葉で示されていたが，そうした自由なスタイルと発想のもとに集まる作品群をもって同紙の文芸文化面に活気を与えていこうとする意欲は，1923 年の時点においても健在であったと言えよう．

漢字以外に「ざつさうゑん」の表記もしばしば用いられたこの年の同欄の特色として第一に挙げられるのは，執筆陣の主力部隊的な位置を占める神戸通信部メンバーの活躍が目立つことである．とりわけ，藤木九三，岡成志，坪田耕吉の 3 人は盛んに執筆，すなわち彼らの作品の掲載回数はそれぞれ 9 回，17 回，8 回を数える．そして，それらの〈雑草〉は生え方も異なれば花の咲かせ方も違う．そのあたりを一瞥しよう．

### さまざまな園丁たち

まず，藤木九三の場合は，神戸通信部部長（『五十年の回顧』〔1929 年 1 月，大阪朝日新聞社発行〕によれば 1921 年 11 月着任）としての肩書もあってか，ほどよいバランス感覚をもって本道を行くといった感じ．大阪朝日新聞社が後援する，坪内逍遥の唱導した児童劇試演会（2/11，於兵庫県会議事堂）前後の「雑草園」に藤木が寄せたのは，「『芸術教育』といふこと」と題する試演会案内も兼ねた評論（2/5）や，自ら創作した児童劇「鬼瓦と時計」の脚本（2/19）だった．また，神戸の地に文芸のムーヴメントを興すことも意図している評論「読後――郷土文芸に就いて――」（6/4）もある（これについては後述する）．さらに，藤木といえばその生涯を通じて〈山〉への興味を抱き，それを行動に移し続けた文筆家，ジャーナリストとしても知られる存在だが，そんな彼の真骨頂を告げる「『山』雑感」と題する随筆（7/30）も拾えたりする．

それに比べると，岡成志の方はジャーナリストとしての才能をより奔放に発揮せしめていっている感がする．本名以外に「岡咄眼（咄眼生・とつがん・咄眼野郎）」という筆名のもと，小説・評論・随筆・紀行文・童話・詩など多岐のジャンルにわたって執筆する一方，「雑草園」欄に因んだ「園丁」という署名も用いて，翻訳も手がければ，賀川豊彦や武林無想庵の談話取材の任にあたってもいる．タイトルの付け方が，「少し間の抜けた話」（8/13）といった銷夏にはうってつけの肩肘張らないものや，「わが脳味噌の臭を嗅げ」（12/24）のように挑発的な響きをもつものなど，なかなか巧みであり，記事の内容面に目をやっても，評論「何程かの真理」（7/2）では世相を風刺する警句を連発したり，詩「遊女焚殺」（10/8）では，関東大震災という災厄の犠牲になった社会的弱者が抱えていた怨念の思いを彼女らになり代わって口にしているというように，そこでは藤木には見られないあくの強さが押し出されている．

坪田耕吉は，昭和になってから神戸の歌人を糾合する役割を果たしていく歌誌『六甲』の創刊（1933 年 1 月）に与った人物だが，そうした坪田の〈歌人〉としての風貌姿勢は，すでにこの 1923 年時点の「雑草園」欄でも確かめられる．すなわち，淡路仮屋沖で起きた「七十号潜水艦」沈没事件を取材した現地ルポ一件を除いて，その他のものはすべて短歌作品（「旅のこゝろ」〈短歌 11 首〉〔5/21〕・「藻ぐさぬるむ」〈短歌

11 首〉11/19〕)であるか,「人麿の歌」(6/11)のような歌人論や「珠藻の会　楽しい集ひと其詠草」(12/10)といった現地女流歌人の集まりの動静を報じた記事なのである．咄眼生の「少し間の抜けた話」と同じ日に載った「朝」は，引っ越してきたばかりの山麓の家で身近に接することとなった自然を感興の赴くままに綴った随想的作品で，その中に「朝の心あまり鋭しわが前にくれなゐの葉はゆれてやまずも」をはじめとする短歌を交えている．以上, 三者三様の動静を素描した．ほかに, 彼らより執筆機会は少ないが,「くまを生」が美術展評や音楽会評の分野でその持ち味を発揮している*[1]ことも付言しておく．

〈郷土〉前景化の試み

1923 年の文壇を揺るがした事件の一つに有島武郎の自殺があり，また関東大震災が文士の趨勢に変化を与えたことは言うを俟たない．むろん「雑草園」欄もそうした出来事に反応して，有島と安子夫人とが交わした書簡集『松むし』を抄録した記事を掲げて有島を追悼したり(「有島武郎氏」〔7/16〕)，神戸に避難してきた武林無想庵を訪れ，渡仏前の彼から時代の転換期における文学思潮に関する談話を引き出したりしている(「プロレタリア文芸に就いて」〔10/29〕)．

だが，国民全体がこぞって目を向ける大きな物語に関する記事を報じるよりも，この欄の読者の多くが生活している神戸で生じる新たな文学動向を収集するためのアンテナを張り巡らしていた点に，「雑草園」の独自性はあるように思われる．そうした〈郷土〉を前景化する動きの代表格としては，藤木九三「『海の詩集』を手にして――佐藤清氏の第三詩集の印象――」(4/9)と「読後――郷土文芸に就いて――」(前出)，佐竹俊「『関西文学』を読む」(7/9)，岡咄眼「『漫窓録から』を読む」(9/3)，坪田耕吉「珠藻の会――楽しい集ひと其詠草」(前出)などが挙げられる．

ところで，郷土の文芸を推すといっても，そこには佐藤清のようによく知られた詩人の近業に関するものもあれば，ほとんど無名の人物の作品について紙面を割くといったケースも出てくるのであって，ここで注目したいのは後者の側である．

たとえば，藤木の「読後――郷土文芸に就いて――」の中で取り上げられた物語詩『彦さ』がそれだ．著者は片山俊，藤木の紹介によれば甲南高等学校の教授である．題名ともなっている主人公の「彦さ」が，幼馴染の「お稲」との間にその後まで紡いでいく切ない恋情や，世を呪い人を恨んで悶死していった男を父とする宿命を一身に背負いながら魂の彷徨を続けていく姿を浮き彫りにしていくこの作品を読んだ藤木は，「物語といへば当然の約束と考へられてゐた叙事詩の傾向を捨て，特に抒情体を採つた氏の創造的努力」に対する讃辞を枕に置いて，いくつもの断章的なグリンプスがじつは全体の筋を構成する上で楔の役割を果たしている形式上の新しさについても高い評価を下している．

印刷所は神戸市兵庫下澤通の共信印刷株式会社，発行所は兵庫県武庫郡住吉村字彌ヶ門一〇六一の著者自宅であることも相俟って，『彦さ』は郷土文芸の未来に力強い暗示を与えるものとして紹介されているのだが，これと同様の感銘を与えるものは郷土で出る文芸雑誌の中からも拾える――．そういう観点に立って藤木が『彦さ』の次に取り上げるのが『想苑』である．前年に創刊されたこの雑誌が，形式は同人組織ではあってもその「内容の真摯なる編輯の忠なる」,「それだけ同人諸氏の一生懸命の努力が溢れ過ぎるぐらゐに緊張し」ている傾向を崩さず，この 6 月から月刊体制に移行したことに対して藤木はエールを送っている．ここで，発行母体とのつながりから見て，ついでに佐竹俊の「『関西文学』を読む」にも触れておく．関西学院文学部文科研究会機関誌として創刊されながら早い時期にゆるやかな同人の結合に基づく編集体制に移行していった『想苑』とは対照的に，『関西文学』の方は関西学院の文学青年派の牙城たる性格を示していた*[2]．あの竹中郁の登場はもうしばらく待たないといけないが，鮫島麟太郎，江原深青をはじめとする幾人かの書き手たちの力量に対して一種の驚きを覚える筆者は，こうした雑誌の存在が「この地方の文学界に刺激を与へる」ことを告げてこの一文を閉じている．

あと一つ，藤木が注目しているのが『詩と音楽と美術』である．これより前の 1917 年に『ミナト芸術』

---

*[1]たとえば「楽壇の春」(2/5)や「神戸の楽壇」(5/7)など．

*[2]この点に関しては拙論「一九二〇年代の関西学院文学的環境の眺望」(『関西学院史紀要』第 16 号，2010・3)参照．

も創刊していた奥屋熊郎が神戸の文化的地盤を固めるべく出したこの雑誌は，須磨板宿の彼の自宅を仮の事務所とする神戸芸術文化聯盟の機関誌的性格を持つものである．6 月 5 日の「神戸附録」に載った「ティータイム」と題するコラム中の言葉によると，本体の聯盟は創刊号が出てから作るという経緯を辿ったものらしいが，藤木は「この会誌が号を重ねてゆくうちに郷土の芸術雑誌としても或る権威を持ちうるやうになれば」という言葉を同誌から引いてその将来を嘱望している．やがて件の聯盟は，その年の秋 10 月に山田耕筰をはじめとする 6 人の音楽家を新開地の聚楽館に招いての音楽会の開催，翌 1924 年 3 月には『詩と音楽と美術』を改題した純芸術雑誌『おほぞら』の創刊[*3)]へと舵を切ることになるだろう．

### 文化活動の企画と実践

以上，「雑草園」が郷土の芸術を前景化する記事を載せている点を確認してきた．だが，「雑草園」は神戸で生じる新たな文学動向を収集することだけに長けていたわけではない．この欄はそれ自身でもって新たな文化的活動を企画して発信，愛読者もその中に巻き込みながらそれを実践して地域に広げていくといった運動体としての側面も持っていた．

そのような事例の一つとして挙げられるのが「スケッチの会」である．すなわち，3 月 5 日の「雑草園」は，その大半を費やして「雑草園三月の会として素人許りのスケツチの会」を催すことについての案内を行っている．その内容を適宜掻い摘んで紹介すると，画の種類としては「墨絵」か「色鉛筆絵」の程度にとどめて誰でも気軽に参加できることを伝えている点，その一方で作品には紙上発表の機会を与えたり，展覧会を催して関西美術界に打って出ることも考えているというような一種のメディア戦略をほのめかしている点，「会費は（中略）止め餓死せぬ程度の昼飯を園丁が心配しておきます」といったユーモア交じりの誘い文句が記されている点などが印象に残る．さらに，こうした予定が伝えられた後には「参加申込者の言葉」が実際に紹介され，この企画を組んだ「雑草園」園丁たちとのコラボレーションが着々と進んでいる気配をうかがうことができる．

さて，実際の「スケッチの会」は雨天で 1 週延びた後の 3 月 18 日に芦屋川付近で行われた．そしてスケッチ終了後，参加者中 12 名の者が船井山荘[*4)]に集まり，「何人が言ひ出したともなくこの会を雑草園の会から離れて独立した永続的の会とすること丶話が極」ったことが，翌日の神戸附録版で報じられている．会の方針をめぐるしかつめらしい議論はそっちのけにした，より自由な雰囲気の意見交換のうちに，「雑草園」が音頭をとって始まったスケッチ愛好家たちの活動が自然生長を遂げたわけだ．第 2 回目の「スケッチの会」は「今回は油絵，水彩画，ペン画何でもかま」わず，5 月 13 日に六甲苦楽園及びその付近で行われた．参加者は 30 人ばかり．その中には当時の神戸の前衛美術を先導していた「赤マントの朝やん」こと今井朝治を含む「コルボー会」の画家たちも交っていた．そして「雑草園園丁咄眼」の開会の辞らしき弁をもって始まった当日の会で創作された作品は，「雑草園」欄に掲載されもし（たとえば 5 月 28 日の同欄には下村政二画の「山と家と水」が載る），「雑草園」肝煎りで六甲ホテルのピアノ室を会場として開催した「スケツチの会第一回作品展覧会」で紹介されもしたのである．

このように「スケッチの会」が発展していくのと並行するかたちで，「雑草園六月の会」として，短歌会の企画も実現されたのだった．来会希望者には予め短歌二首を「雑草園」宛に送ってほしい旨が告知されていたが，園丁こと岡咄眼の「〔雑草園主催短歌の会〕感激とよろこび　富田砕花氏の思出深い講話」（6/25）によれば，6 月 23 日に県会議事堂第二会議室で行われた集いには 70 名を超える参加者があったという．来会者には会費二十銭と引替えに，彼等が前もって送ってきた短歌を印刷して十六頁の小冊子

---

*3) 1924 年 3 月 17 日の「ざつさうゑん」中の「新刊紹介」欄は，『おほぞら』創刊号に岡田春草の創作「胡桃船長の話」や岡咄眼「朝代夫人の生活の断片」，そのほか富田砕花，藤木九三，楠田敏郎の詩歌などが掲載されたと記している．また，この時点で神戸芸術文化聯盟の事務所（連絡先）が神戸市布引町三丁目愛国ビルディング内に移ってきていることもわかる．

*4) 1923 年 3 月 11 日の案内記事「スケツチの会」によれば，芦屋川停留場下車の船井長治氏邸のこと．船井氏は大阪朝日新聞販売店主とある．

にまとめた「雑草園短歌の会詠草集」が配られ，「スケッチの会」が今井朝治なら，こちらの方には郷土を代表する歌人富田砕花が来会，「石川啄木の歌について」と題して講話を行ったことが写真入りで報じられている．（大橋毅彦）

## 2. 映画に関する動向

1923 年の神戸における映画を取り巻く状況を確認したい．言うまでもなく，映画は撮影したフィルムを上映するものであることから，神戸ならではのローカリティが他の文化に比して見出しにくい観がある．しかし，周知のとおり当時の映画は説明者（弁士）が存在し楽団の演奏もあることから，現在のような画一的なものではなく，各館が個性を発揮し集客を計った様子が窺える．弁士の説明の仕方や声色などで映画の印象が変わることもあり，その影響力の強さから弁士は免許制となる．さらに「活動弁士の免許に一種の口述試験を採用」（7/8）の記事も見られ，試験が実施されるようにもなっている．また，各館によって上映する映画や配給会社が異なることから，独自の雰囲気が醸し出されたと思われる．

『神戸附録』で映画の主たる情報源といえば，「演芸たより」欄が充実している．「演芸たより」は，大衆演劇や歌舞伎など，さまざまなジャンルの催しが紹介されているが，その中でも映画に関する情報が紙面を大きく占めている．映画館ごとの上映映画の梗概や特徴，出演俳優の紹介，入館者数の多さや観客の受けなどが示されている．他にも「映画界」欄があり，話題の映画を取り上げて梗概を紹介し批評したり，他作と比較したりしている．上映映画の内容や特徴を誇示する広告欄もあり，読者を映画館へ誘う紙面構成となっている．

### 神戸新開地の映画館

まず，紙面に登場する神戸新開地の映画館を見てみたい．当時の新開地は，市電筋をはさんで上と下とで雰囲気が異なり，「上の方はやや上品で新宿風，下の方はまったくの庶民の町で浅草風[*5)]」だったという．その神戸市電より北方に 1913 年開館の聚楽館があり，南方には，洋画の牙城の第一朝日館と，それに対抗するキネマ倶楽部．さらに，二葉館（マキノ映画封切館），錦座（日活系），菊水館（松竹蒲田映画），松本座，有楽館などが[*6)]，北方の湊川遊園地正門を基点として南方の鉄道ガードに至る間の新開地表通りに沿ってあった．

当時の新開地映画館に通いつめ，自著の伝記で詳細に記しているのは，神戸市兵庫区で生まれ育った映画評論家の淀川長治（1909 ～ 1998 年）である．家族全員が「映画狂」で，「父と母は錦座，祖母はユニヴァーサル，姉二人はキネマ倶楽部」に足を運び，小学生の淀川はその全てに同行した．中でも錦座は最も豪華な造りで，西洋ものと日活の日本映画を共映しており，パール・ホワイトの連続劇は全てここで観たという．また，高校では教員室で熱弁をふるったことから，授業の一環として月 1 回，全校生で映画観劇をするようになったというエピソードもある[*7)]．新開地に通いながら日本を代表する映画評論家となる，淀川を育てた土壌が確認出来る．

これら神戸新開地の映画館の中でも主となっていたのが，洋画専門の第一朝日館とキネマ倶楽部である．年の明けた 1 月に，前年度の神戸における映画トピック「神戸の活動界」（A ～ C）が 3 回連載され，その最初に両館の興行戦を評者の「覆面冠者」が取り上げて論じている（1/22）．前年の六月に第一朝日館とキネマ倶楽部が，映画「東への道」の興行権争奪を繰り広げて「イガミあひの興行戦」を続けた結果，映画も説明者の技術も同一だが，宣伝方法とオーケストラの優越によって，キネマ倶楽部の勝利になったという．2 館同時上映は「本邦映画史始まつて以来のものであつた丈に，大正十一年の神戸活映界の忘れてはならないことの最大なもの」と位置付けている．

---

*5) 改田博三「神戸と映画・芸能」（神戸市史紀要「神戸の歴史」第六号，神戸市企画局，1982・3.）

*6) 5 に同じ.

*7) 5 淀川長治「神戸がふるさと」（『わが心の自叙伝　映画・演劇編』神戸新聞社総合出版センター，2000・4.）

新開地の象徴的存在とも言える聚楽館は，舞台劇などの上演が主で映画の記事は少ないものの，他館と異なり文学性の強い記事が散見される．例えば，プラトン社主催で「女性愛読者招待」の「高級文芸映画劇会」を催し，招待券を雑誌「女性」4 月特別号に付すことや，聚楽館での小山内薫の「映画劇講演」，「愛読者以外の方の為めに指定席二百名」分を設ける（3/27・28 広告）ことが示されているのである．その翌月には，谷崎潤一郎作の映画「舌切雀」が聚楽館で上映されることになる．「評判の谷崎潤一郎氏作同愛嬢鮎子さん主演の童話劇「舌切雀」三巻及び実写三種」が開演されるとし（4/24），「谷崎潤一郎氏の「舌切雀」は鮎子嬢の可愛いゝ演技を含んだ芸術的童話劇」（4/26）で，「引続き谷崎鮎子嬢主演の「舌切雀」及び「アルコール」が受けてゐる」（4/28）と，続けて谷崎映画の紹介をしている．谷崎は 1920 年 5 月から翌 21 年 11 月にかけて，大正活映株式会社の脚本部顧問となり，「アマチュア倶楽部」など 4 本の映画を製作しており，前述の淀川長治も少年時代に観た谷崎映画の芸術性を繰り返し褒め称えている．しかしこの 4 本の中に「舌切雀」は入っていない．「舌切雀」の存在について触れている論[*8)]もあるが，詳細は明らかになってない．「キネマ旬報」（2/21）を見ると，「舌切雀」監督・撮影ヘンリー小谷，子雀谷崎鮎子となっており，さらに「ヘンリー・小谷氏近況」として，「お伽劇「舌切雀」の興行等について二三地方へ挨拶」（4/1）とあるように，谷崎作とはなっていない．この記事の時点は，震災以前で谷崎が関西にいないので情報が錯綜したのだろうか．今後も調査を続けるが，そうした経緯の一端が『神戸附録』から確認できる．

**1923 年の概括**

1923 年を概括的に捉えれば，世界的なヒットとなったストローハイム監督・主演の「愚なる妻」や，ルドルフ・ヴァレンチノ主演「血と砂」が紙面を賑わわせている．対照的な両者の評価を見てみたい．

「愚なる妻」は，「大阪で二十日間，東京で二十一日間連日大入を占め」る人気ぶりで，ユニバーサル社が記念標を建てる計画があることを明かす（2/26）．内容としては，「細心の注意を以て現実の生活に熱情の思ふ存分」を働かせ，「肉欲心理の深刻味や貞操乱れる女人の悶へを大々的に描いた，見るものに強い感銘を与へる」（3/3）ものと好評で，ストーリーの良さなど含め，高い評価が与えられている．さらに，監督・主演のストローハイムを米国政府が信用し，映画に登場する巡洋艦や本物の艦長が出演することを示し（3/2），「撮影費用に百万弗を投じたことを誇張するのは的外れ」で，華やかなストーリーに関わらず，表面的な内容に終始しない「生活に交渉のあるストーリイになつてゐる点」をこの映画の長所に挙げ絶賛している（3/3「映画界」）．

このように，映画の内容や監督･主演者への評価が高い「愚なる妻」に対し，「血と砂」は俳優ルドルフ・ヴァレンチノの見せる映像的美しさ，娯楽性や筋の面白さに注目が集まっている．「映画界」（4/6）では，「血と砂」をパラマウント社「三名画の一つ」とし，「経費百五十萬弗使用人員三萬人」を用いたスケールの大きなもので，「映画の内容は色彩と情調に富み映画劇的要素を極度に高調し」，「闘牛士に扮するヴアレンチ氏の悩殺的な演技が見物を惹きつけ，（中略）クライマツクスが賞賛の的」とされている．同日の広告には，「全米の天地を震撼し／帝都三百万の人気を沸騰せしめたる／古往今来比類なき大映画／ロ（ママ）ドルフヴァレンチノ氏主演」とあり，スケールの大きさや本場アメリカと，東京での人気ぶりを誇示する．その一方で，「映画界」（4/9）では評者の「たゞを」が，「ヤンキー式な亜米利加人の好奇心」ばかりで「日本人には何んだか見てゐてちつとも深みと味いのない映画」と辛辣な評価を下す側面もある．ともあれ，両作ともに高い人気を誇り，映画界を盛りたてたことが記事に反映されている．

また，世界最大の「米国パラマウント会社の東洋代理店が設置され，提供する映画の関西封切りを第一朝日館が引き受け」（1/24）ているためか，湊川のカフェーでは「愛活家の集り　パラマウント会生る」（5/26）といった現象も起きるほど，同社映画への愛情が神戸から発信されているのである．さらに，同社の「ふるさとの家」を上映する際，「東洋最初の封切　全神戸市民諸君 !! 諸君は如斯名画が当市に於て日本最初の封切をした事実に接したことがありますか？」との謳い文句を掲げ，第一朝日館が日本初封

---

[*8)] 山中剛史「銀幕の夢魔―谷崎潤一郎「人面疽」攷」（「藝文攷」第七号，2002・1）

切であることをアピールする(6/7 広告)．そして，松本座では「ユナイテッド社と提携革新第一回特別大興行」(11/29)を行っている．海外，国内で人気の高い映画が早く確実に観られるというのは，大きな宣伝文句となり観客を誘引しただろう．

映画における関東大震災の影響はどうだろうか．1919 年創刊の「キネマ旬報」が，震災後に阪神沿線の香櫨園に 1927 年まで本社を移し．三宮や居留地にユナイテッド･アーチスツ，フォックス，ユニバーサルなどの各社が集まっており[*9]，神戸の町は映画色が強かったと推察される．映画ファンを沸かせる出来事として，「蒲田俳優来神」の見出しで「震災の惨禍から命から〻逃れた蒲田の活動俳優が命拾ひの感□から日頃愛顧の御礼を申述べるために三十日新開地菊水館のステージより午後一時と八時の二回観衆に挨拶する」(9/30「映画界」)といった記事が見られる．午後 3 時と 9 時に登場すると広告にもあり(9/30)，蒲田映画俳優が震災によって来神し，神戸新開地の映画を盛り立てる様子が窺える．

1 年を通して見てみると，第一朝日館，菊水館，キネマ倶楽部などで「ニコニコ大会」と称する映画大会が頻繁に行われている．「ニコニコ大会」とは，外国の喜劇映画を数本まとめて上映するものである．1916 年 8 月に浅草電気館が始めたもので，当時は喜劇物だけの興行など考えられなかったが，予想に反して人気を博したという[*10]．『神戸附録』では，バスター・キートンやチャップリン，ハロルド・ロイド，ロスコー・アーバックル(愛称デブ君)などの喜劇俳優の名が登場している．

### 映画への集客誘引

次いで，映画への集客を誘引する記事について確認したい．まず，楽奏への特別な力の入れ込みに着目する．第一朝日館で上映された「ユーモレスク」は，「ユーモレスク来る…第一朝日館…フエラ氏伴奏」(3/23「映画界」)の見出しを付し，前年度の米国映画協会による優秀作品となったことを記した上で，「伴奏はユーモレスクの名曲を遠藤和一氏がタクトし別に帝国ホテル楽長ラ・フエラ氏も来神する筈」とある．この映画のために東京から帝国ホテルの楽長を招聘し，映画を盛りたてようとする様子が窺える．また，同館では「ふるさとの家」上映の際にも，「此の名画を更に価値づける為に／帝国ホテル楽長ラ・フエラ氏再招聘」，「名画封切祝福宣伝花火／初日と二日目には大倉山と会山(ママ)に於て数百発の花火を打揚げます□同時に花火の中から出る符号入ビラ及び源氏旗等を御修拾得の方に入場券，特待券を進呈」と，派手に花火を打ち上げる上に，ビラや入場券，招待券を花火から入手できることを広告(6/7)に掲げる．

こうした耳目を集める派手な宣伝方法は，第一朝日館と対抗するキネマ倶楽部においてもなされる．ダグラス・フェアバンクス主演の「ロビンフツド」では，多額の権利金を支払ってキネマ倶楽部が上映を獲得したことを報じている(5/26)．その翌日，「ロビンフツドの宣伝飛行」の見出しで，「神戸出身の青年飛行家藤原延氏は右映画の初日当日全市に低空大旋回飛行をしてロビンフツドの宣伝をすると共に請待券，入場券一万枚を撒布する」と，朝日館の花火同様，空から券を撒くという派手な演出で注目を集めようとする(5/27)．さらに，「伴奏の名曲「ロビンフツド」に宮崎指揮者以下オーケストラ部員は目下苦心の練習中」と，楽奏にも力を入れていることをアピールする(5/30)．飛行機を用いての派手な宣伝手段と音楽への力の入れ込みは，先に見た前年度における第一朝日館とキネマ倶楽部の興行戦を踏襲しているだろう．

また，新聞と映画がコラボレートした宣伝として，大阪朝日新聞連載から映画化された作品の上映が挙げられる．松本座では，「白縫物語」の上映に際し，「松本座改築＝記念興行「白縫物語」の上映　読者半額券配布」の見出しで，大阪朝日新聞夕刊連載小説「白縫物語」は，「神戸が始めての封切りで順次大阪，京都と公開」される予定で，牧野省三監督により「純映画劇式に撮影され映画の優秀は日活近来の傑作」との評価があることを示し，「本社神戸販売局では特に読者優待の意味で同興行中右各等半額割引券を本日一般に配布した」と記している(4/20)．「女傑を活躍せしめ全編変化と興味に富んで呼吸もつかせぬ

---

*9)改田博三「神戸に集まった映画人」(『神戸と映画・芸能』豆本灯の会，1981・7)

*10)吉山旭光「ニコ〻大会」(『日本映画界事物起源』シネマと演芸社，1933・12．引用は『日本映画論言説大系　第 3 期　活動写真の草創期』ゆまに書房，2006・1.)

面白さ」（4/22）という「白縫物語」は，わずか 2 ヶ月足らずで同じ新開地の二葉館でも上映されることになる．「蜘蛛の妖術が素的に面白く」（6/1）「神出鬼没な大友若菜姫」（6/5）の「反逆を草双紙式に脚色した」（6/2）ものであるが，「本紙夕刊連載小説で草双紙的に極めて面白く脚色され而も本紙の半額割引券がついてゐるので連日大人気」（6/4）を博しているという．すでに松本座で公開されたにも関わらず，新聞購読者に半額の特典を付けることで観客を獲得しているのである．

（永井敦子）

## 3. 演劇に関する動向

文学史・文化史的な意味で大正期の演劇を考えるなら，ヨーロッパの近代的な演劇の影響を色濃く受けた「新劇」の台頭が最初に思い浮かぶだろう．演劇の刷新を目的に，西欧近代演劇に学んだ島村抱月と，その師である坪内逍遙によって演劇研究所が設立され，後期文芸協会が運動を開始したのは 1909 年のことである．その後，島村抱月と松井須磨子（「カチューシャ可愛や」の愛唱歌で有名）のスキャンダルが原因で文芸協会が解散し（1913 年），芸術座の結成．1918 年の島村抱月の病死と松井須磨子の自殺など話題にことかかない．あるいは，非商業主義的な演劇を模索したアンドレ・アントワーヌによる自由劇場の運動に倣い，小山内薫と二代目市川左団次が自由劇場をスタートしたのも 1909 年である．創立公演はイプセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」で，九回の公演をもって自然消滅した（1919 年）．通説では，この二つの運動が大きな影響を与え，日本の近代演劇は始まったといわれている．山本有三や長田秀雄，真山青果，菊池寛，久米正雄などが劇作家として，新たな世界を切り開いていくこととなる．築地小劇場（1924 年～）やプロレタリア演劇運動もその一例である[*11)]．

今回作成した 1923 年の『大阪朝日新聞　神戸附録』データベースには，演劇に関わるものとして 270 程度の項目がピックアップされており，そこにはもちろん近代演劇関係のものが含まれている．一例にすぎないが，坪内逍遙の来神（2/9 ～ 11 に記事）や文芸座による菊池寛「恩讐の彼方に」の公演（11/7）．来日した伊太利大歌劇団が聚楽館にて，「トスカ」（2/21），「リゴレット」（2/22），「ラ・ボエム」（2/23）を上演したこと，早稲田大学劇術会の「ハムレット」が聚楽館で上演されたこと（6/12）などである．

ただし，虚心に『神戸附録』をながめるなら，大きなウエートを占めるのは，そういった知識人向けの演劇ではない．たとえばそれは，［分類 2］に「評論」としてあげられている記事を見れば明らかだ．全部で十八ある演劇に関する「評論」記事は次のように分類される．

喜劇関係（7）：「はるしばゐ　義士廼家喜劇（聚楽館）」（1/8，舟＝神戸通信部の森山舟三による）．「十郎の喜劇」（5/15，舟）．「十郎劇二の替り　彼は舞台享楽者だ」（5/20，舟）．「喜劇『骨箱』」（5/20，写真一葉あり）．「淡海の喜劇」（6/30）．「五九郎劇」（10/12，舟，写真一葉あり）．「五九郎劇二のかはりの評判」（10/18，写真一葉あり）．

新国劇関係（4）：「我等の澤正（上）八千代座開演」（6/3，舟，写真一葉あり）．「我等の澤正（下）八千代座開演」（6/5，舟，写真一葉あり）．「新国劇を見て（上）」（10/30）．「新国劇を見て（下）」（10/31）．

それ以外（7）：「宝塚春季公演＝花組の印象から＝」（4/21, 中澤ひろし（投稿））．「苦楽園の自然景劇『湖上の美人』印象記」（6/12，写真二葉あり）．「〔つゆ上りの＝雑草園〕ざむぼあ小劇社　野外劇「尺八」」（7/23）．「勘弥の文芸座　聚楽館の霜月興行」（11/8，舟，写真一葉あり）．「文芸座二の替りを見た感想」（11/14, 舟）．「海老一徹五郎　喜劇と滑稽盡し」（12/2）．「『仏陀と孫悟空』◇黒幕座の試演を見て◇」（12/18, F 生）．

以上のように，まず喜劇が存在感を示し，新国劇が続くのである．ここからは，以上の二つをとおして『神戸附録』をながめていきたい．

---

[*11)] 諏訪春雄・菅井幸雄編　講座 日本の演劇 5『近代の演劇 I』勉誠社，1997･2.

## 喜劇

現在，テレビなどのメディアを通して，関西といえばお笑いのメッカというようなイメージが定着している．漫才などとともに「吉本新喜劇」や「松竹新喜劇」が全国的な知名度を持つ．が，この喜劇という演劇のジャンルはそもそも明治になってから盛んになったものである．むろん狂言は(能とともに)，古くから連綿と続いてきたものの，広く一般に享受されたわけではない．庶民が好んだ江戸歌舞伎にも独立した喜劇が存在しなかった．

喜劇専門の劇団としては，曽我廼家五郎十郎一座が元祖といわれている．上方では，享保の頃より「俄(にわか)」(表記には諸説あり)という笑いを目的としたジャンルの芸能が盛んとなった．即興的なお笑いを祭礼の人通りの多い中で演じ，皆の目を楽しませようとするものであった．江戸の末頃には，「流し俄」から色街で演じられる「お座敷俄」に変遷しはじめ，中身も歌舞伎狂言をもじった趣向の「俄芝居」というものも出てきて，次第にプロ化していった．明治になり，俄師として人気の役者が何人も現れるなか，1904 年 2 月に曽我廼家五郎, 十郎が大阪･浪速座で旗揚げ．やがて人気を博すようになる．「松竹新喜劇」の源流というべき彼らの活躍に刺激され，大正期にはあまたの喜劇団が活動を始める．「評論」に取り上げられていたものはすべてそういう性質のものである*[12]．

1913 年, 東京の帝国劇場をモデルに新開地に建てられた聚楽館は, 神戸を代表する娯楽施設であった．1923 年の『神戸附録』を通覧すると，さまざまな出しものが一週間程度で次々に上演されている．この聚楽館で約一ヶ月にわたって正月公演を行ったのが義士廼家･中野女優団合同劇であった.「演芸たより」によれば，初日の演目は「第一喜劇「屠蘇機嫌」二場，第二歌劇「甲板上の兵隊さん」一幕，第三社会劇扇港情話「恋の成功」，第四幕末情話日疋重亮作「兎の檻」一幕，第五笑劇「お茶屋違ひ」四場，顔ぶれは由良之助，五万楽，笹川，喜宝，浮世絵村，花子，花柳其他」である．「聚楽館の義士廼家劇は元日以来大入り続き」(1/5)．「連日満員の盛況」(1/8)．「二の替りは花柳方面の附込みあり引続き盛況」(1/13)．旧喜劇「花見ちがひ」が可笑しく「満場を揺り動かしてゐる」(1/21)．「好評裡に本日限り打揚げ」(1/29)などと，元旦より 29 日まで，四度の「替り」を通して盛況かつ好評である．

内容はどのようなものであったか．舟＝森山舟三による評論「はるしばゐ　義士廼家喜劇(聚楽館)」(1/8)は，その概要を簡略に記している．「屠蘇機嫌」は「嫉かぬ女房を嫉かせる策略の薬が利き過て大騒ぎになる他愛のない狂言」「開幕劇としては軽石のやうで罪がない」．「甲板上の兵隊さん」は「花柳のスカツチ老兵が存分に燥やぐ，ダンスも合唱も大したものでないが見てゐて賑やかであり綺羅びやかでもあり肩の凝らぬのは何より」「五萬楽の日本士官も大いに笑はせる，大砲の弾を打返すところなど茶劇としては申分がない」．「恋の成功」は「土地柄を神戸に被せた喜劇で一種の正劇らしい匂ひは出てゐるが麗々しく社会劇と銘打つほどの代物でもない」．「兎の檻」は「天誅組の吉村寅太郎に絡まる情話を取扱つた髷もの」「人生を兎の檻と比喩へたところに多少象徴的(色濃くはないが)の傾向もある」「例の日疋情調たつぷりだがこの作などは別にキザでもなく臭くもない方」．「お茶屋違ひ」については割愛されているため「演芸たより」(1/7)の記事をあげると「九州八ッ代の藩邸を料亭と間違へて奥方腰元を相手に散財した大阪紳商の行違ひをスケッチした喜劇で(略)笑はしている」とある．記事を頼りに想像するしかないが，新劇と銘打たれた「兎の檻」のような少し真面目なものも織り交ぜつつ，歌や踊りをプラスした短い軽妙な喜劇が続くようである．

1 月 8 日の評論で舟は，「我等は素より義士廼家一派に崇高な芸術の匂ひを求むるものでもなく彼等の将来に期待の瞳を睜るものでもないが，しかし良い意味の通俗劇として絶えず目先の変化と興味を捉へることに注意し「多数」に迎合すべく努力してゐるこの一座の興行政策(時代を顧慮した)には理屈を離れて感服いたしてゐるものである」という評を記している．

つぎに「評論」に登場する喜劇は曽我廼家十郎一派である．1914 年に芸風・作風の違いから曽我廼家五郎と別れた十郎は，病み上がりの身体で久し振りに聚楽館の舞台に立った．「演芸たより」(5/11)には「相当興味を以て迎へられてゐる」とある．内容に関しては, 評論「十郎の喜劇」(5/15)に「『親父の極道』

---

*[12]『喜劇百年～曽我廼家劇から松竹新喜劇～』松竹株式会社関西演劇部，2004・2.

は菊池寛氏の『父帰る』を喜劇でゆくと云ふやうな筋で笑ひと涙が巧く交錯してゐる，髭五郎の炭屋熊蔵が表口でタドンを揉んだり黒い手で眼を拭くあたり，単に思ひつきといふばかりでなく，喜劇の歩むべき正しい道筋を指さしてゐる」とある．「演芸たより」には「人気沸騰」（5/13），「相変らず舞台一杯に抱腹絶倒の喜劇を見せてゐる」（5/14）と記されているが，「彼は心から舞台を楽しみ舞台を占有してゐる」「舞台享楽者だ」との舟による評価を見る限り，喜劇界をリードする十郎の面目躍如たる舞台であったのだろう．喜劇「骨箱」についての評「筋は大して奇抜ではないが作者和老亭當郎こと曽我廼家十郎氏の凡ならざる手腕が随所に光つてゐる」（5/20）が示すように，作者としての力量も無視できない．が，残念なことに十郎は 1925 年 12 月 4 日に没している．

志賀廼家淡海一派も取り上げられている．淡海は，江州音頭の音頭取りから新派の一座を作るものの，曽我廼屋劇の評判を聞き筋で笑わす喜劇に方向転換，劇中歌「淡海節」が全国的に人気を博した．聚楽館で 6 月 28 日より幕を開け，二の替わりを経て 7 月 8 日まで「大受け」（7/6）だったようである．

最後の曽我廼家五九郎はもともと曽我廼家五郎の弟子であったが，1912 年に浅草へ進出，初期のサイレント映画にも出演し，麻生豊の四コマ漫画を原作とする主演映画「ノンキナトウサン」（1925）が大当たりするなど，浅草の喜劇王と呼ばれた．曽我廼家五九郎一座は女形を廃止し，下座音楽にかえて洋楽を用いるなど，モダンな喜劇をめざした．1923 年の『神戸附録』が最初に大きく取り上げるのは 9 月 29 日で，関東大震災で焼け出された「五九郎が神戸でも旗揚げ」という記事であった．10 月中旬からの興行の前宣伝になっている．評論「五九郎劇」（10/12）によると，10 日から始まった聚楽館公演では（26 日まで），震災をあてこんだ「当日の曽我廼家五九郎」と「四畳半と三畳」が好いとのことである．前者は震災のスケッチ劇で，ある程度の真実味が出ているもの．後者については「確に面白い，五九郎と十次郎がそれぞれの真価を発揮して余すところがない」とある．評論「五九郎劇にのかはりの評判」（10/18）には，小橋梅花作「室の早咲き」の梗概・特徴が記されている．

> ◆女髪結のおいち（光子）は亭主梅吉（五九郎）の女狂ひに心を痛めてゐる，ところが隣の写真館の若旦那島村秀雄（十次郎）から長唄師匠の娘お夏（桜子）に送る手紙を託される話を聞違へて自分に来てゐるものと一図に思ひ亭主と別れ話を始める◆夫婦別れを平気（わか）でやつた梅吉もお夏のはづかしさうに頼んだ秀雄への取持を自分自身のことゝ信じてゐる，話が岐れて秀雄の心とお夏の心は外を流れて艶歌師のために通ずる，梅吉おいちは元通り仲直りをする◆三軒の家を一つ舞台に見せたその場面には絶えず長唄「道成寺」の恋の手習ひの一節が各々の人々の心に溶けて淡い情調を漂はしてゐる，といふ筋，甘つたるい有平糖のやうな狂言だが情調的な舞台が何より好い◆作者小橋梅花氏は舞台を知つてゐる点，五九郎を知つてゐる点，幾分詩の味を解してゐる点など作の上にいろいろの好いものを持つてゐる，特に一幕ものにそれが多く「三畳と四畳半」（ママ）「恋の手習ひ」（改題室の早咲き）等は傑作として数へ得る

小橋梅花は，座付作者の小橋梅夜の誤りかと考えられるが，ここに五九郎劇の特徴が現れている．曽我廼家五郎や十郎がみずから膨大な量の台本を執筆し，そこにある種の限界もあったのに対し，五九郎一座は文芸部を置いた．他に金子洋文，麻生豊，小生夢坊らがおり，「斬新な企画・社会性や風俗描写に富んだ演し物で浅草の大衆のみならず学生インテリの客も掴んだ」[*13)]ところに特徴があった．

### 新国劇

1917 年，島村抱月主宰の芸術座を脱退した澤田正二郎らによって新国劇が結成された．東京の新富座で旗揚げ公演を行ったが失敗し，関西に拠点を移した後，行友李風作『月形半平太』，『国定忠治』が大評判となる．真に迫った立ち回りを多用した時代物で大衆の圧倒的な人気を得た．剣劇の元祖と目されるが，菊池寛「父帰る」「屋上の狂人」，山本有三「嬰児殺し」なども上演した[*14)]．

『神戸附録』における，新国劇の扱いは別格である．6 月 3，5 日に掲載された評論「我等の澤正」（舟）

---

[*13)] 向井爽也『喜劇が好きなあなたへ』演劇出版社，1996・12.

[*14)] 川島順平『日本演劇百年のあゆみ』評論社，1972・9.

は欠点にもふれているが，タイトルはもとより「我が新国劇には若い我等の『時代』が生んだ芸術といふ愛着がある，芝居は下手糞でも，不器用でも，味噌汁にお茶漬式でも，同じ米櫃の米を焚き同じ皿の中を挾みつゝいきてゐる人間といふ心持や感じが舞台に漂ってゐる」というように，偏愛に満ちたコメントを付している．「演芸たより」（6/19）には「連日札止め」とあり，絶大なる人気を誇っていた．演し物に関しては，「我等の澤田正二郎がずつと遠い昔の生活様式を現はした「髷物」に成功したことは鳥渡意外のやうであるが，その成功が舞台様式や舞台雰囲気になく，舞台思想（形は髷物でも思想は近代的）にあつたことを思へば意外でもなんでもない」とあり，評者が髷物以外の演目も評価していることがわかる．また，10 月 28 日より聚楽館で幕を開けた公演も「破れん許りの入り」（「演芸たより」11/1）で，評論「新国劇を観て」（10/30, 31）では，「彼の魅力はセンチメンタルを適当に使ひ分けるところにあります，センチメンタルは「魅力」であつて「価値」ではありません，澤正は「価値」に於て若い見物を惹きつけてゐるのではなく，「魅力」に於て惹きつけてゐるのではないでせうか」という指摘とともに，「新時代の光明を呼吸してゐる」新国劇の「客層の大部分が若い」ことを述べている．詳しくふれることはできないが，この評論からも，立廻りをふんだんに取り入れ「歌舞伎と新派と新劇を混ぜ合わせたような」ところが，新国劇が「大衆に受け入れられ喜ばれた大きな理由だった」（川島順平）ことがわかる．『神戸附録』はあくまでも，大衆によりそった視点で演劇を評価するスタンスをとり続けるのである．

（山本欣司）

## おわりに

以上，1923 年の『大阪朝日新聞　神戸附録』について，「雑草園」，映画，演劇に関する動向を概観した．「雑草園」に関しては，さまざまな園丁（支局員）たちの存在や〈郷土〉前景化の試み，文化活動の企画と実践について明らかにした．また，映画に関しては，神戸新開地の映画館の様子，1923 年の概括，映画への集客誘引の様相を明らかにした．さらに演劇に関しては，今も愛され続ける喜劇に強いスポットが当てられていたこと，新国劇への愛着が声高に語られていたことが明らかになった．

この他にも別稿「〔調査報告〕1923 年の『大阪朝日新聞　神戸附録』その 2」（『神戸海星女子学院紀要』52 号，2014・3）では，芸能に関しては，浪曲・落語・浄瑠璃・歌舞伎などの興行についての動向を明らかにし，1923 年に外国人観光客や被災者を受け入れた神戸が，観光地として伝統芸能を再評価していく様子を明らかにした（杣谷英紀・箕野聡子）．美術に関しては，神戸美術協会展と神戸美術展覧会，コルボーなどの美術団体，画家個人の動向を明らかにした．とくに前衛的なとらえ方が注目された．写真に関しては，芸術的な写真の受容状況と写真競技会に代表される大衆的広がりを明らかにした（島村健司）．参照いただけたら幸いである．今回の試みによって『大阪朝日新聞　神戸附録』の性質の一端が明らかになったのではないかと考える．

［分類 1］に準じていえば，文学，音楽，スポーツ，教育，宗教，文化など，記事・事項のピックアップは果たしたものの，今回は調査が行き届かなかったジャンルもある．それらを今後の課題として，神戸近代文化研究会ではさらなる調査・研究を続けていきたい．